

令和5年度入学 総合型選抜

レクチャー①・レクチャーレポート・レクチャー②・ふりかえりレポート 講評

レクチャー①**【概要】**

テーマ：多様性への対応を考える ～交通分野の取り組みについて～

交通分野における多様性への対応として、「社会的障壁を除去する」というバリアフリーの取り組みと、「より多様な人々が使いやすいように環境をデザインする」というユニバーサルデザインの取り組みを、具体例とともに説明した。併せて、交通分野における取り組みが今日直面している課題についても取り上げることで、一つの施設整備で対応できる範囲の限界をふまえながら異なる立場の人たちと対話を重ねていく必要性についても、問題提起した。

レクチャーレポート

レクチャーレポートでは主として、レクチャー①で解説した図表や考え方を正しく理解できているかを問うとともに、複数の図表や考え方を比較参照しながら、論理的に説明できる力をみることをねらいとした。

問 1**【出題のねらい】**

交通分野におけるバリアフリーの取り組みと、その経緯に関するデータを読み取るとともに、現状の取り組みの中で生じている課題を整理し、さらなるバリアフリーの取り組みが今後求められる理由について、論理的に説明できる力をみることをねらいとした。

【講評】

(1)は、レクチャー①で解説した「バリアフリー化 100%を達成した施設の割合が一時的に低下した理由」が理解できているかを問う問題である。対象施設の基準が変更されたという原因は指摘できていたが、母数が増えたことで割合が低下したという理由までは言及できていない解答も多くみられた。

(2)は、レクチャー①で説明した増加率の導き方を、別のデータに応用して計算する問題である。①は、「身体障がい児・者数」の増加率を求めるものであったが、レクチャー①で説明した「障がい児・者の総数（“身体”以外の“知的”・“精神”を含めた総数）」で計算した解答もみられた。

(3)は、レクチャー①の内容と問 1(2)で明らかにした数値に基づき、これまでの日本におけるバリアフリー化の経過と今後の課題について説明する問題である。問 1(1)でも使用した【図表 3】に基づくバリアフリー化の進展だけでなく、レクチャー①で問題提起した“平均利用者

数の少ない旅客施設”のバリアフリー化が課題であること、また、問1(2)で算出した二つの増加率から身体障がい者の社会進出が増加していることを明示して、さらなるバリアフリー化が必要であることまで説明できている解答は一定数みられた。しかし一方で、レクチャー①の内容や問1(2)の数値を用いることなく、課題提起のみになっている解答も多くみられた。

問2

【出題のねらい】

ユニバーサルデザインの交通分野における取り組みとその現状に関して、バリアフリーとの違いや、より多くの人が使いやすいことを目的とするときに念頭に置かねばならないことについて、レクチャー①での説明を理解し、それを論理的に説明することができる力をみることをねらいとした。

【講評】

(1)は、低床バスによって乗降しやすくなった人の分類と具体例とをあげることで、レクチャー①で解説した【図表6】の概念図の理解度を確認する問題である。概念図の理解が不十分と思われる解答、分類と具体的な対象者が対応していない解答が若干数みられた。

(2)は、低床バスでもカバーできない人の具体例をあげる問題である。(1)と同様、レクチャー①で例示していたことから、解答は概ね良好であった。

(3)は、問2(1)と(2)の解答をふまえ、ユニバーサルデザインの現状とさらに考えなければならぬことを説明する問題である。問2(1)から、低床バスの導入によってバリアフリーより広くカバーできていること、問2(2)から、それでもなお交通困難者が存在していること、すなわち、一つの「設備改造（ハード面）による対応」では限界があることは概ね解答できていた。しかし、レクチャー①で指摘していた「人からの配慮・助け合い（ソフト面）による対応」の必要性についても言及している解答は少なかった。

問3

【出題のねらい】

問1と問2で確認したバリアフリー・ユニバーサルデザインの現状と課題に加えて、ユニバーサルデザインによって不便が生じる事例や、整備する側と利用する側とで受けとめ方が異なる事例を具体的に考えるとともに、交通分野のみならず、今後、多様性に対応していく際に必要となる考え方について、論理的に説明できる力をみることをねらいとした。

【講評】

(1)は、【図表11】と【図表12】に基づいて、低床バスのメリットとデメリットを分析・考察する問題である。低床バスのメリットについては概ね解答できていたが、デメリットについ

では、【図表 12】とは別の観点での解答が一定数あった。

(2)は、【図表 14】に基づいて、点字ブロックを整備する側の意図と、利用する側の受けとめ方の違いについて説明する問題である。多くの解答では、整備側の良かれと思った取り組みが、利用者にとっての不安になっている可能性があることを、具体的かつ対比的に説明できていた。

(3)は、問 3(1)・(2)の解答をふまえ、多様性への対応について、その社会環境を整備する側と社会に生きる人びとが、それぞれがどのようにあるべきか、自身の考えを論じる問題である。レクチャー①を通じて「社会環境を整備する側」として必要な視点を述べるとともに、「社会に生きる人びと」のあり方について、レクチャー①の内容をふまえて自身の学習・経験を再構成して記述してもらうことを期待したが、多くの解答では自身の経験を説明するにとどまっていた。

レクチャー②

【概要】

テーマ： 多様性への対応を考える ～色の扱い方について～

多様性への対応を考える対象として「色」を取り上げ、色の見え方と感じ方が人それぞれであること、他者とのコミュニケーションにおいて色を用いる際に注意すべきことについてレクチャーを行った。全ての生物・ヒトが同じように色を認識しているわけではなく、私たちヒトの間でも色の捉え方が多様であることを紹介した。さらに、色に対するイメージや好き嫌いには、国や地域、性別、世代、個々人によって共通点や相違点があり、誰もが色について自分と同じような印象をもっているとは限らないことを確認した。これらのことから、色を扱う際には、目的や環境に応じて工夫するとともに、可能な限り、情報がすべての人に正確に伝わるようにすることの必要性を説明した。

ふりかえりレポート

レクチャー②の内容を正しく理解し、複数の資料を活用して、色の見え方の違いや色を扱う際に考慮すべき要素について問うた。また、自己ワークおよびグループワークでの他者の意見を参考にして、自身の色に対する考え・主張を客観的に表現する力と、レクチャー①、レクチャー②及びグループワークを通して、自らの考えがどう深まったか、あるいは変化したかを論理的に説明できる力をみることをねらいとした。

問 1

【出題のねらい】

レクチャー②の内容を正しく理解し、複数の資料を活用して、色の見え方の違いや、色を扱う際に考慮すべき要素を説明する力をみることをねらいとした。

【講評】

(1) は、二色型色覚と三色型色覚における色の見え方の違いを説明する問題であった。前者は二次元で、後者は三次元で色の広がりをつめるものであったが、両者の違いの説明が十分ではなく、色の三要素との関係性についても曖昧な解答が多くみられた。

(2) は、嗜好色型と嫌悪色型との違いを明確に示したうえで、両価型の特徴と扱う際の注意点を説明する問題であった。両価型を扱う際の注意点については概ね解答できていたが、両価型の特徴については不十分な解答も多くみられた。

(3) は、レクチャー②3章の内容に基づき、ある企業が新たな地域に店舗の看板を設置する際に「色」について考慮すべき要素を三つ提示する問題であった。三つの要素を正しく説明できている解答が多かったが、二つの要素の提示にとどまった解答もみられた。

問 2**【出題のねらい】**

自己ワークで提示した資料とグループワークでの他者の意見を参考にして自らの考えを深め、自らの色に対する考え・主張を根拠に基づいて論じるとともに、客観的に評価できる力をみることをねらいとした。

【講評】

(1) は、顧客の特徴について、アンケート回答者がK社製品やコーポレートカラーについてどのように認識しているかを読み取る問題であった。一部のアンケートデータのみから読み取ったために、記念事業の二つのねらいとの結びつきが十分に説明できていない解答が多かった。

(2) は、自らが選択した最終案について、不採用案と対比しながら説明することを求める問題であった。不採用案を提示しながら最終案を述べることはできているものの、それぞれの主張の根拠や理由が具体性に欠けるか、明示されていないものが多くみられた。また、グループワークの経過を記述しているだけで、最終案を採用した根拠として不十分な解答もみられた。

(3) は、問 2(2)で述べた結論における色の考え方が、記念事業の二つのねらいにどのように対応しているかを評価する問題であった。二つのねらいのうち「顧客への感謝を伝えること」について評価できている解答が多かったが、もう一つの「今後の海外進出も視野に入れた顧客拡大」については、色の対応とその根拠の説明不十分な解答が多くみられた。

問 3**【出題のねらい】**

レクチャー①、レクチャー②、およびグループワークにおける他者の意見をふまえて自らの思考の過程を整理し、考えがどう深まったか、あるいは変化したかを論理的に説明できる力を

みることをねらいとした。

【講評】

二つのレクチャーおよびグループワークを通じて、自身の思考が深化あるいは変化していった過程については概ね記述できていた。多様性の考えに基づき、これから起こしていきたい行動について言及している解答も多くみられた。しかしながら、「多様性」を自らのなかでどう捉えたのか、あるいは定義づけたのかといった説明が十分ではない解答が多くみられた。この問題は、題意として「多様性への対応をどう考えるか」というものであり、自身の「多様性」の理解とその説明は、自らの解答における主張の基盤となるものである。また、問2と同様に、自らの主張についての根拠の明示が弱い解答も散見された。